

漢文に親しませる授業の工夫

永 楽 仁 八

I. 提案

一. はじめに

大分県立蒲江高等学校の地元、蒲江は、大分県南部の臨海部の最南端に位置し、夏にはリアス式の海岸線に沿って十萬株以上の浜木綿が咲き誇る、美しい海と漁業の町である。

一九九二年度、第三三回広島大学教育学部国語教育学会研究発表資料の中で、私は蒲江高等学校の状況について、以下のように報告した。

蒲江高校も、進行する過疎化にともない、四年前は二六二名であった全校生徒数が、現在は一三七名となり、独立校としての存続が危ぶまれている。

生徒数減少の要因は、他にも考えられる。道路事情が改善され、隣接する佐伯市との交流が盛んになり、市内の進学名門校を頂点とする「輪切り体制」の中に

組み込まれてしまったこと。そのために蒲江高校は成績によって振り分けられ、不本意ながら入学してくる生徒の多くなったこと。そのために、学習意欲の低い生徒が増加して、学習指導・生徒指導において、さまざまな「問題行動」が起きたこと。これらの「問題行動」によって、地域の人々の本校に対する評価が下がり、いっそう入学希望者が減少している。こうした悪循環の中に蒲江高校はある。

三年経過した一九九五年現在、学校内の雰囲気は大きく好転し、地域での評価も次第に高まってきた。懸念されていた生徒数も、年度当初には一八四名へと次第に回復している。もちろん、これは入学してくる生徒たちの気質の変化に因るところが大きい。また、一九九二年度に学科（情報事務科）新設を行い、制服を変更するなどのイメージアップの試みが功を奏したとも言える。しかし、もっとも大きな要因は、「授業こそ

が学校の基本である」という考え方のもとに、教職員が一致協力して、授業の改善に取り組んできたことであると考えている。

二、学習者の実態と指導の立場

本校生に限らず、高校生は、あふれる物や氾濫する情報にどっぷり浸かった生活に慣れ切っている。彼らの興味の中心は、オートバイ・自転車・ファッション・音楽などであり、さらに言えばそれらを消費することであるように思われる。そして彼らの価値観を形成するのは、感覚的に情報を提供するテレビ・ビデオ・漫画・CD・カタログ雑誌などであろう。

このような、「現在」のを楽しむ彼らの生活の中に、できるだけ楽しくわかりやすい形で「古典」を投げ入れてみたいと思う。このことよって、彼らの認識を少しでも広げ、また、「現在」を見直させるきっかけにしたい。さらに、将来、生徒たちの中に、古典に親しむ生活をする者が生まれることを期待して、いわゆる「種播き」と位置づけた授業を行おうと考えている。

しかし、本校に入學してくる生徒のほとんどは、根本的にみずからの学力に自信を失っているように感じられる。そのため、学習に困難を感じるとすぐに意欲を失いがちである。国語学習においては、特に、表現に即して考えながら読むことを苦手としている。

高等学校で本格的に登場する古典分野では古語や文法、

漢文訓読法などの壁が加わり、より一層の困難を感じさせてしまう。そこで、ある程度の困難を取り除く必要があるのだが、一方で、そういう生徒たちこそ、困難を自ら乗り越え、何かをつかみたいと願っていることも事実である。

難解な古典作品を、自分の力で考え理解できたという達成感が、彼らの意欲を引き出すことも多い。指導者からの援助の方法・タイミングを常に工夫する必要がある。

以上の考え方をふまえ「漢文に親しませる授業の工夫」を試みてきた。具体的な三つの実践例を報告したい。

三、指導の実際

1. 漢文入門期指導の工夫（一九九四年度・二学期）

対象、一学年普通科・情報事務科 資料①②

【単元設定の理由】

一九九四年度一学期、国語Ⅰの古典分野は、古文のみを扱った。二学期から、いよいよ漢文の学習を開始する。漢文は、本来、中国語である。それだけに、学習の意義を生徒に理解させることは、古文以上に難しい。

教科書（基礎国語Ⅰ・学校図書）の最初の漢文教材は、故事成語の「蛇足」「虎威」である。これらの学習を通して、現代の言語生活の中にも漢文が生きていることを理解させることはできるだろう。しかし、「なぜ漢文中国語」が日本の古典として扱われるのか」という素朴な問

いに答えるためには、我が国の祖先たちが、訓読法を創造し漢文を享受してきた歴史を知らせることが必要であると考える。その方策として、身近な題材である、市販のウーロン茶のラベルにある中国語文の解説をとおして、祖先の漢文享受の努力との類似体験をさせつつ漢文訓読法の原理を理解させる、漢文導入単元を構成してみた。

【単元目標】

- (1) 身近な現代中国語文の意味を考えることをとおして、表意文字としての感じの特色と漢文享受の歴史の概略を理解させる。
- (2) 短い漢文を読む練習を通して、漢文訓読法の基礎的事項を身につけさせる。

時間	学習プリント	指導事項
1.5	第1次 漢文入門1 宣伝文を読む 漢文入門2 漢文享受の歴史 漢文用語の整理 (訓点・書き下し文・口語訳)	指導事項 ◎身近な現代中国語文の意味を考えることを通して、表意文字としての漢字の特色と漢字訓読の原理を理解させる。 ◎漢文享受の歴史の概略を理解させる。 ◎漢文字習の用語について理解させる。 ◎訓点のうち、送り仮名について

第2次	理解させる。
1.5	漢文入門3 漢文訓読の基礎 ◎「レ点」「一・二点」「上・下点」について理解させる。

【指導上の留意点】

- (1) 第一次で、宣伝文の意味を考えさせる際、生徒の興味を喚起するために実際にウーロン茶の空缶を提示してみた。

- (2) 漢文入門1のプリントについて

- ① 取り上げた宣伝文中で、なじみのない漢字・語句については、ヒントとして読み方と意味を与えた。

- ② 宣伝文の意味を読み取った方法を各自でふりかえらせ、送り仮名を付けたら、語順を入れ替えたりという漢文訓読の原理に気づかせるための問題を設けた。

- (3) 漢文入門2のプリントについて

- ③ 後の学習で混乱させないために「訓点」「書き下し文」など、漢文用語の意味を整理する欄を設けた。

- (4) 第二次の訓点の説明においても、第一次の学習との関連をもたせるために、無理な部分もあるが、あえて宣伝文を用い、その後、教科書からの例文で練習させた。

【反省】

- (1) 学習事項の定着について、漢文訓読法について、三回(普通科は五回)確認テストを実施した。平均点は10点満点で7・5点だった。

全体としては良好な成績だと考える。しかし、最低点の生徒は、0点であり、個人差に対応できていないことが問題である。個別指導を行うなど、一層きめ細かな指導を行うべきであった。

(2) 単元間のつながりについて

導入単元の設定によつて、訓読法の基礎が、それぞれ事前に指導されていたために、次の単元に無理なく進むことができた。また、故事成語(「蛇足」「虎威」)の扱いにゆとりができ、作品の背景を含めた内容の読み取りまで深めることができた。このことによつて、一層、学習者の漢文に対する興味を引くことができたと感じている。

2. 思想教材の指導の工夫(一九九三年度・三学期)

対象 二学期普通科 資料③④

【単元設定の理由】

思想教材は難解で学習者には歓迎されないという先入観が、指導者である私自身にあり、積極的に取り扱うことが少なかった。しかし、思想教材は、人生・学問・政治のありかたに対して考えさせ、各自の考え方を持たせるきっかけとすることができるといふ点で、現代の高校生にぜひとも必要なものではないだろうか。

孟子の『性善説』荀子の『性悪説』とは、どちらも儒教の必要性を説くものでありながら、人間理解という点において対照的である。この二つの論の中心部分を読み、比較

検討して、その優劣(好悪)を各自で判定するという活動をとおして、学習者をそれぞれに「人間の本性」について考えさせる契機としたいと考えた。

【単元目標】

- (1) 書き下し文・口語訳・解説資料を読むことをとおして、『性善説』『性悪説』の内容を整理し、それぞれの人間理解の視点の違いを理解させる。
- (2) 『性善説』『性悪説』を読んで、感想を書くことをとおして、「人間の本性」についての各自の意見を持たせる。

【指導の流れ】

時間	学習プリント	指導の目標
第1次 (1)	人間の心は天使か悪魔か?	<ul style="list-style-type: none"> ◎問題意識を喚起する。 ◎作者について理解させる。 ◎教材本文の概略を理解させる。
第2次 (5)	二 性善説を 読んでみよう 三 性悪説を 読んでみよう 六 性善説 vs 性悪説まとめ	◎書き下し文・口語訳から、『性善』『性悪』それぞれの論の組立てを整理させる。 ◎解説文を読み、双方の論を比較させ、その違いを理解させる。 ◎それぞれの論を読んで自分の感想を書き、さらに、人間の本性についての自分の意見をまとめさせる。
感想文を書こう		

【指導上の留意点】

(1) 教科書に掲載されている教材本文は、学習者にとつては長く、難解である。そこで、内容理解と各自の意見を持たせることを学習活動の中心とし、読み取りの際の困難を取り除くために、書き下し文・口語訳・解説資料を用いて授業をすすめることとした。

(2) 言語事項の指導は以下の方法をとった。

① 漢字・語句の読みで重要なものについては、書き下し文の中に書き込む欄を設けた。

② 句法や語句で特に理解させたかったもの（再読文字「将」「猶」「助字」「由」）については、書き下し文や口語訳の中に空欄を設け補充させた。

③ その他の重要語句については、口語訳の中の該当部分に傍線を引かせることで、注意を喚起した。

(3) 感想文を書く用紙を独立させ、「性善説」に対する感想・「性悪説」に対する感想・両者を比較した上での自分の考えを一枚の用紙にまとめさせることで、各自の考えの変化が一目でわかるようにした。その際、学習者の意見がある程度導き出すために、理由の部分三文以上で書くように指示した。

【反省】

(1) 従来のような口語訳をしながら読み進める方法では、学習者の考えを導き出すことは難しかったと思われるが

今回は、内容や用語は稚拙であるが、約四分の三の生徒が、自分なりの感想文を完成させた。未完成の生徒については、学習意欲を喚起できなかった点、書くことへの抵抗感を取り除けなかった点などにおいて、一層改善していく必要がある。

(2) 他の友人の考え方を知ることによって、学習意欲を高めることができると考えられるが、学年末の慌ただしい時期の実施であったこともあり、感想文を他の生徒に紹介する機会が十分に持てなかったことが反省される。

3. 郷土の漢文教材の発掘（一九九三年度 二学期）

【単元設定の理由】

対象 三年生普通科 資料⑤

蒲江町が昭和五十三（一九七八）年に発刊した「蒲江町史」の中に「蒲江の文学」という章があり、「蒲江八景」という江戸時代末期に作られた漢詩が紹介されていた。蒲江の美しい風景を、八首の漢詩に詠んだものである。当時、豊後佐伯藩は約八万巻に及ぶ蔵書「佐伯文庫」、藩学「四教堂」などを持ち、学問を奨励していた。漢詩「蒲江八景」は藩内の文人たちが、蒲江浦大庄屋、御手洗玄太の懇願によって作ったものであるという。また、近年、町起こし運動の一環として、町内各地に詩碑が建立されはじめた。

生徒たちが、日頃見慣れた風景を詠んだ漢詩ならば、彼らの興味を引くことができ、理解も比較的容易である。だる

う。漢文式の誇張表現と実際の風景との比較もできる。そして、数か月後には、ほとんどの生徒が社会人として、県外へと巣立って行く。そのような生徒が故郷蒲江に愛着と誇りが持てるようにという願いをこめて、最後の漢文単元は教科書を離れ、自主単元「蒲江八景を読む」を実施した。

【指導目標】

- (1) 郷土を題材とした漢詩を読むことによって、故郷の美しい自然を見つめ直させる。
- (2) 郷土の自然・文化・歴史等に対する愛着と誇りを持たせる。

【指導の流れ】

時間	学習プリント	指導内容
一次 (1)	蒲江八景について	◎「蒲江八景」の成立事情を理解させる。
二次 (8)	一 烽火晴嵐 二 青龍秋月 三 館島落雁 四 鰐州夕照 五 東光晚鐘 六 鷹山夜雨 七 粒嶼帰帆 八 轟山暮雪	◎漢詩を音読させる。 ◎漢詩を書き下し文させる。 ◎題名から現在の地名を明らかにさせる。 ◎プリントの空間補充をしながら鑑賞文を完成させる。

【反省】

- (1) 郷土の作品であるということで、学習者には好評だった。卒業考査の欄外に書いてもらった感想にも、以下の例のように、もつとも印象に残った授業は「蒲江八景」だというものが多かった。

* 古典の授業で一番の思い出は蒲江八景です。蒲江を歩いていて、この歌の書いた石を見ると、「あ、古典でやったやつや」と思いました。(T君)

* (前略) 不思議と蒲江八景は大好きでした。蒲江のことをここまで良く思って歌を作ってくれた人がいたんだと思うと、とてもうれしかったです。蒲江っていい所なんだなあとあらためて思いました。(Gさん)

- (2) 指導者が作成した鑑賞文の空欄に語句を補充してゆくという方法は、一斉授業を成り立たせるためには必要であったが、生徒の思考を限定してしまうという短所があった。学習者の状況によっては、グループ研究を取り入れるなど、もつと違った展開が考えられる。

II. 協議

一応、三学年にまたがる実践の体裁を整えたものの、三

年間を見通した計画はなく、その場、その場での思いつきによって、単元を構成してきたことが最大の反省である。

さて、協議の中でご指摘いただいた中に、「親しませる」という用語の内容をより吟味せよ。」というご意見があった。私自身、研究授業の学習指導案や実践報告の中で、幾度も「親しませる」という言葉を用いてきた。しかし、内容の吟味は伴わない用い方であったと反省している。

辞書の「親しむ」の頃には、次のような説明と用例があった。

あるものごとくに何度も接して、身近に感じる。

*龍舌蘭(寺田寅彦)「戸棚から八犬伝、三国誌などを引っ張りだし、おなじみの志乃や道節、孔明や関羽に親しむ(『日本国語大辞典』から部分を引用)

「親しむ」とは、各自の主體的な活動であり、決して、「親しませる」などと強制するものではないと言える。これをもとに私なりに考えてみると、表現は不十分だが「古典に楽しむ」とは、

① 人生の中で、継続的にしかも主體的に、繰り返し古典作品に接しようとする事。

② ①によって自らの人生経験を通して作品の理解・鑑賞をより深めるとともに、自らの人生を豊かにしていくこと。

とまとめられるだろう。

このように生涯教育の中で考えると、高等学校の古典教育は、導入期に位置づけられるだろう。とすれば、私たち国語教師の仕事は、(比喩的な表現が過ぎるが)学習者と古典の世界との出会いの場を演出し、学習者の手を引いて古典の世界に導き、さらに古典に楽しむための道筋を示すことではないだろうか。

古典との出会いや導入の時期には、マンガや、歌謡曲などによって学習者の興味を引く方法も有効であると思う。しかし、導入から「親しむ」までの道筋は、私にとって、まだ明らかではない。山の頂上は見えても、登山路がわからなくては、案内者としては失格であろう。導入の次の段階の検討、さらに「親しむ」段階へいたる道筋を、高等学校三年間でどのように示すかの検討を続けていく必要がある。

(大分県立大分舞鶴高等学校)

資料①

国語1学習ノート。『漢文入門』その一

(一組)(一番)

問一 次は、S社製のウーロン茶のラベルに書かれていたものである。ヒントをもとに意味を考えなさい。

〔宣伝文〕 一 「 」 語

福建省 茶葉分公司 有自信 推奨 此品。
無糖・無着色。最適 於運動後、或 吃完
油膩菜後 飲用。

〔ヒント〕

- ①福建省 中国南部の省。「省」は中国の行政区の単位。
- ②公司 工場。分公司は本社に対する支社にあたる。
- ③或 或る。④吃 食べる。⑤油膩菜 油っこい料理。

〔意味〕 一 「 」 語

福建省の茶葉分公司は

日本も中国も漢字という共通の文字を用いている。漢字はそれ自体が意味を持つ「表意文字」であるために、音韻が違っても、文章の大意を推測することができる。現代中国語である右のラベル表示の意味が、だいたい理解できるのはそのためである。

問二 ウーロン茶の宣伝文の意味を理解するために、君たちの脳味噌コンビューターは、どのような働きをしたのだろう。考えてみよう。

国語1学習ノート。『漢文入門』その二

(一組)(一番)

古代の日本人は、当時世界最高水準にあった中国の文化を取り入れようと決死の覚悟で荒海を越えた。その努力によって、日本に漢文が伝えられた。最初、日本人はこの漢文を外国語として読もうとした。だが、やがて中国語で書かれた文章(漢文)は、音韻を入れ替えることによって、簡単に日本語に翻訳できることを発見されたのである。この漢文訓読法の発明によって中国の古典は日本の古典になったのである。

漢文用語語の整理

(1) 訓占

振り仮名・送り仮名
返り点(音韻を入れ替える時の記号)

福建省茶葉分公司、有自信推奨此品。

無糖・無着色。

最適於運動後、或吃完油膩菜後飲用。

(2) 書き下し文

福建省の茶葉分公司は、自信を有ちて此の品を推奨す。糖無し。色を著くること無し。運動後、或は油膩菜を吃べ完へし後の飲用に最適なり。

(3) 口語訳

福建省の茶葉分公司は自信をもってこの品物を推奨します。運動の後や、油っこい料理を食べた後の飲用に、最適です。無糖・無着色です。

資料②

国語I学習ノート

「漢文入門」その三

() (組) () (番)

漢文訓読の基礎

【その一】漢字に振り仮名を送り仮名を送る。

「振り仮名」は漢字の右側に平仮名で。

「送り仮名」は漢字の右下にカタカナで。

問一 ラベルに登録する語句に送り仮名をつけた。書き下し文にしなさい。

- (1) 推奨 ↓ ↓ ↓
- (2) 運動後 ↓ ↓ ↓
- (3) 吃完 ↓ ↓ ↓

【その二】「レ点」一文字だけ返って読む場合の記号。

□ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻

問二 ラベルに登録する語句にレ点をつけた。書き下し文にしなさい。

- (1) 無糖 ↓ ↓ ↓
- (2) 無着色 ↓ ↓ ↓

問三 練習です。書き下し文にしなさい。

- (1) 大器晩成。 ↓ ↓ ↓
- (2) 有レ備無レ憂。 ↓ ↓ ↓
- (3) 覆水不返レ盆。 ↓ ↓ ↓
- (4) 一寸光陰不レ可軽。 ↓ ↓ ↓

【その三】「一・二点」二字以上離れた字へ返って読む場合。

* ハイフン「一・二点」で返った後を熟語で読む場合。

□ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻

問三 ラベルに登録する語句に「一・二点」をつけた。書き下し文にしなさい。

- (1) 有自信 ↓ ↓ ↓
- (2) 推奨此品 ↓ ↓ ↓
- (3) 吃完油腻菜 ↓ ↓ ↓

【その四】「上・下点」一・二点を含んで、返って読む場合

□ ◻ ◻ ◻ ◻ ◻

* 一・二点を先に読み、上・下点を読む。

☆無音で読む字

☆平仮名に直す字

問四 ラベルに登録する語句に上・下点をつけた。書き下し文にしなさい。

最_{ナリ}適_{ナリ}於_{ナリ}運動後、或_ハ吃_{ナリ}完_{ナリ}油腻菜_{ナリ}後_{ナリ}飲_{ナリ}用_{ナリ}。

問五 練習です。書き下し文にしなさい。

- (1) 尽人事、待天命。 ↓ ↓ ↓
- (2) 百聞不如_ト一見。 ↓ ↓ ↓
- (3) 他山石、可以攻_レ玉。 ↓ ↓ ↓
- (4) 如_ク揮_ク快_ク刀、断_ク乱_ク麻。 ↓ ↓ ↓

資料③

漢字書ブリット 中国の思想の二三

水竹江忠志就を註記んで見よ。

問一書きて又の漢字の読み方で、注すべきものに誤名をよらない。(一)は平仮名、問二書きて又中の漢字の読み方の口語の部分を例を引かない。

【書き下ろし】

今、人の性は、生まれながらにして、利を好む有り、

生れながらにして、利を好む有り、

資料④

漢字書ブリット 漢江八景の二

「漢江八景」は、江戸時代末期に、当時の佐伯藩藩主秋山敬久が、秋山敬久はじめとする文人達によって遊覧された。現在、漢江の遊覧は、漢江に「漢江八景」との漢詩八百首と約款八首の詠集が、それぞれ採録されて置かれていた。この漢詩の詠集の「漢江八景」は、二月二十六日といふ日付が書かれていた。八景の詠集はそれ以前といふことになる。

漢江遊覧に訪れた漢詩をもとに、「漢江詩史」は次のように成立の事情を書いている。

某日佐伯城から多数の文人が、漢江の遊覧に遊覧された。詩の詠集は漢江遊覧に遊覧された。秋山敬久が加わっていた。

一冊は漢江遊覧を詠集したり、夜を徹して詩を作り歌を詠んだのであつた。たまたま詠集のすくれた漢江の詠集を、「漢江八景」といふ名で本名である中国の漢江八景にならうと、漢江八景をつくつてついでに、漢江八景を詠集した。

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧 漢江遊覧

